



第 136 号

令和 6 年 3 月 15 日発行

可児市教育委員会

可児市教育研究所

可児市広見 1 丁目 5 番地

TEL(0574)63-4841

e-mail : kyoikukennyu@city.kani.lg.jp

実践者であれ 専門家であれ 頼られる人であれ

可児市小中学校長会長（東可児中学校校長） 村上 克

着想の大切さ

大学時代の卒業論文の話です。私は、運動能力の発育発達に関する縦断的な研究を考えていました。でも、実態調査のために幼児や高齢者に 50m 走や立ち幅跳びをしてもらうわけにはいきません。何かほかの方法はないか悩んでいると教授から「村上さん、研究は、着想が肝やで。」と言葉を掛けられたのです。そこで私は、一つの測定器具で瞬発性や巧緻性が測れるであろう『ボールキャッチ・アンド・ラン測定器』なる装置を考案しました。測定方法はこんな感じです。塩ビの筒にテニスボールを転がします。出口は、ティッシュで見えないようにして、ボールが飛び出した瞬間、うつ伏せ状態の被検者は、起き上がり駆け寄って弾んだボールをキャッチして戻るといいます。ボールが見えて起き上がるまでの反応時間やバウンドしたボールをキャッチする動作をビデオで撮影しました。手作り測定器を携えて、わくわくする気持ちで幼稚園から高齢者施設まで行脚し研究に没頭したのを覚えております。

運動を科学する

中学校体育、陸上競技（短距離走）の実践です。当時の世界記録保持者カールルイスの走りを紹介し、学習意欲を喚起しました。刺激を受けた生徒は、トップランナーの走りに対して次のような問いを立てました。①走力（スピード）は時速どれくらいだろう。②100m を何歩で走破しているのだろう。③スタートからどのあたりで最もスピードが出ているだろう。④トップスピード時の歩幅はどれくらいだろう。

当時はまだインターネットのない時代です。生徒は書籍から答えを導き、走運動を可視化しました。

その後、生徒は、自分の走りを分析することに学びが向かいました。走る前、竹ぼうきとトンボを使って足跡一つない状態をつくり、手分けして 20m 間隔に測定者を立てタイムを測定しました。区間記録を算出し、最高スピード

の区間の足跡を頼りにストライドを明らかにしました。生徒たちは、前半飛ばし型、後半追い上げ型、息切れして最後までもたない、など自分の走りの特徴を「見える化」しました。中には、腰にビニールテープを巻きつけ、尻尾のように長く垂らした先に重りを付け、最高スピードになると重りがふわっと浮かぶ「トップスピード判定機」を作って自分の走り確かめる生徒もいました。

種をまく

初めての中学校勤務の学級担任 1 年目。いちばん難しい年頃の 2 年生を受け持ちました。生徒のために頑張る、そんな思いで毎日の指導に当たっていましたが、学級には問題を抱える生徒もおり、その思いが空回りしていました。そんな時に声をかけてくださったのが、ベテランの K 先生でした。いつも穏やかな口調で話され、他の授業では騒がしい生徒も惹き付ける授業をする評判の先生でした。その先生からいただいた言葉です。

「3 年間で生徒を変えようなどと気負う必要はないよ。『あのとき先生が言っていたのはこういうことだったのか』と気付くときが必ず来るから。そのときのための『種』を蒔きなさい。」

心がスッと軽くなった瞬間でした。もちろん、この言葉が消極的な生徒指導を意味するものでないことは自明です。そして、この言葉は、その後の私の教員人生において、心の拠り所となりました。

これまでの体育実践や数多の人たちとの出会いが、自分を成長させてくれたのは言うまでもありません。

若い先生方には、意欲的に実践を重ねてほしい。「量」こそが「質」に転化するものです。そして、身近にいる先輩から色々なことを吸収してほしいと願います。先輩の先生方は、その姿や言葉で若き教員を育てていただければ幸いです。私たち一人一人が、教育実践を通して可児の子どものたちの笑顔の“もと”を育てていきましょう。

令和5年度 可児市学校所員会 研究実践報告

令和5年度 学校所員会の研究実践について
紹介します。

1 学校所員の研究テーマ

「自ら考え、仲間と学び合い、表現する子の
育成 ～協働学習の理念に基づいた授業
づくりを通して～」

2 研究内容

新学習指導要領における授業改善の視点で
ある「主体的・対話的で深い学び」の実現を目
指し、佐藤学氏が提唱する「学びの共同体」
の「協働学習」の理念を学びました。そして、
その理念に基づき、各教科、道徳、特別活動
などの授業実践を行い、学校が大切にしたい
「笑顔の“もと”」を育む教育活動につながる
授業づくりの手立てを明らかにしていきました。

3 実践の状況

「協働的な学び」についての研修

① 5月17日 学校所員会

・研究の進め方、研究テーマ・内容につ
いて

② 6月7日 学校所員会

演題『「協働学習」の進め方』

講師 倉知 雪春 先生

(愛知文教大学 学びの共同体スーパーバイザー)

③ 8月22日 学校所員会

・各学校での協働学習の進め方の交流

④ グループ別研究授業・授業研究会

○Aグループ 10月20日

桜ヶ丘小学校 授業者 曾我 治寿教諭
英語「Summer Vacation in the World」

○Bグループ 10月31日

広見小学校 授業者 藤原 由実教諭
音楽「せんりつの重なりを感じ取ろう」

○Cグループ 11月8日

東可児中学校 授業者 浦谷 神佑教諭
理科「身近な物理現象」

他、実践報告者13名による実践

⑤ 1月18日 学校所員会

・今年度の実践交流とまとめ

4 実践を終えて

今年度は、まず所員の先生方が、自校の育み
たい「笑顔の“もと”」とは、「授業の中で、協
働的に学び合う子どもたちの姿にどう表れるの
か」を明確にイメージするところから研究をス
タートしました。そして、実践を重ね、その効
果を検証していきました。

今年度の大きな成果は、こうした所員の実践
を「笑顔の学校」公表会と連携し、各校の先生
方にお伝えできたことです。所員の実践報告に
は、自校の先生方に「笑顔の“もと”」を育む授
業づくりの手立てについて、強い願いをもって、
伝える姿が記されていました。

笑顔の学校公表会では、倉知先生にご教授い
ただいた「学びの共同体」について発表を行っ
た。教室にいるすべての児童を見捨てず、工夫
を重ねて全員を授業に参加させることが教師
の使命であるということや、共有の課題とジャン
プ課題を設定し、一人ではできないことを、
グループで協力し知恵を出し合って問題に取り
組むことで、新しい学びがあったり力が伸び
たりすることを伝えた。

本時は、音楽科の実践であったが、帷子小の
「笑顔の“もと”」である、「よく観る よく聴
く よく考える」姿は、他の教科でも生かすこ
とができる。例えば、算数科では、問題を「よ
く観て」前時との違いを見つけたり、既習事項
を使って解決できないか「よく考え」たり、仲
間の発言を「よく聴いて」自分の考えと比べる
ことで、新たな発見があったり…と、児童が「で
きた・分かった」と思えるような学習をする上
で、「笑顔の“もと”」は必要不可欠だと感じた。

帷子小学校 小関美菜子教諭の実践報告より

「笑顔の“もと”」とは、全ての先生方が全ての
教育活動の中で「育てたい」と心から願うこと
で育まれるものであると感じます。その中核を
担うのは、学校の中で、もっとも多くの時間取
り組む授業です。今後も、さらに学校が大切に
したい「笑顔の“もと”」を育む授業づくりの手
立てを明らかにするべく、研究を進めていき
たいと考えています。



令和5年度 可児市 「笑顔の学校」公表会を終えて



11月2日(木)は、『令和5年度 可児市「笑顔の学校」公表会』を、各学校のご協力のもと、無事に終えることができました。

公表校の広見小、広陵中には、「笑顔の“もと”」を育む実践について子どもの姿を通して発表をしていただき、誠にありがとうございました。広見小は、「笑顔の“もと”」を「ともに」と掲げ、児童や先生方はもちろんのこと、地域・家庭を巻き込みながら育もうとされていたり、子どもの自覚を促すためにキャリア・パスポートを工夫しながら効果的に活用したりされていました。広陵中は、「笑顔の“もと”」を「たくましさ」と掲げ、生徒に「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」ことを重点に置きながら、生徒自らが考え、思いや願いを実現させる行動力を、授業や特別活動の両輪から育成されていました。

当日は、市内全小中学校にて、公表校の動画を視聴した後、研究会を実施してもらいました。今渡北小学校では4つのグループに分かれて公表校の実践を学ぶとともに、グループを Teams でつなぎながら、独自に作成した「笑顔の“もと”」を育む学校づくり構造図やプリントを使って、自校を振り返り、今後の教育活動につないでいく深まりのある研究会が行われていました。また、学校所員の尾関先生は、独自にプレゼンテーションを作成し、「笑顔の“もと”」を育むための授業実践について発表されました。

年に1回ではありますが、各小中学校において、未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」を育むための『各校の特色ある教育活動』について、公表校の実践から学び、自校の実践を振り返って今後の教育活動に生かすこの公表会は、大変意味のあるものだと思っています。そして、この公表会が開催できるのは、実践を発表していただく公表校はもちろんのこと、各校の実態に応じて研究会を企画・運営いただく全小中学

校のご協力のおかげです。心より御礼申し上げます。

来年度も、先生方のご理解・ご協力をいただきながら、可児市内すべての小中学校にとって、実りある公表会となるよう努力して参ります。ありがとうございました。

【今渡北小学校 尾関 朝香教諭の発表より】



本校で育みたい
「笑顔の“もと”」
に関わって

自律
問題・課題を主体的に解決しようとする姿勢

- ・お昼の放送をもっと楽しいものにしたい
- ・給食のお残しをできるだけ少なくしたい
- ・他の学年へのあいさつが少ない
- ・他の学年とずっと仲良くなりた
- ・忘れ物をする人がまだまだ減らない
- ・掃除中の話し声をなくしたい
- ・地域の人とずっと関わりたい
- ・教室の掃除がきれいにできていない ……等

自分達の暮らしを自分達の手でよりよいものに

尾関先生は、5年生国語科「よりよい学校生活のために」の単元を通して、今渡北小学校が目指す「笑顔の“もと”」である「自律・尊重・協働」の力をどのように育んでいくかを発表されました。「自律」とは、「問題や課題を主体的に解決しようとする姿である」ととらえた実践から、子どもたちの中に、「自分たちの暮らしを自分たちでよくするという意識が芽生えた」というすばらしい成果が発表されました。

また、最後のお話が大変印象的でした。

今回の実践を通して、「自律・尊重・協働」というと一見難しいことのように感じますが、そんなことはなくて、むしろ学校生活のあらゆる場面で私たちが指導していることの多くが、そこにつながっているのではないかと感じました。国語の授業だけでなく、各教科や道徳、学活、総合、学校生活のいろいろな場面で、「笑顔の“もと”」を育てていけたらと思います。

【研究会での尾関先生のお話より】

きっと、これからも今渡北小学校では、「笑顔の“もと”」を育む実践が積み重ねられていくと、期待感でいっぱいになる発表でした。

令和5年度 「笑顔の学校」公表会 広見小学校

学校の教育目標

心豊かでたくましい子
仲良く助け合う子 自ら考えを深める子 体をきたえる子



笑顔の“もと”

広見小学校の未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」は・・・
くとも・くともにつくる・くともが高まる・くともにする
仲間との協働を通して、達成感・充実感を味わい、自己肯定感・自己有用感を高めることが、新たな活動への意欲や問題解決に向かう挑戦心につながるとともに、人への信頼や人の中で生活する安心感にもつながる。

【研究主題】

多様な考えに寄り添いながら、共に高まり合うことを目指す児童の育成
～自らの考えを表出する国語科の授業の在り方～

【研究仮説】

単元の指導目標や言語活動を明確にし、単元構想図に自分の考えをもつ時間、それをもとに仲間
に伝え合う手立てを意図的に設ければ、自分の考えを表出したり、仲間の考えに寄り添って考えたり
することができ、学びの質が高めることができる。

【研究内容】

- ① 単元構想の明確化
 - ・単元の指導目標や言語活動を明確にし、単位時間に応じた追究形態を位置付けた単元構想図を成し、単元の出口までの意識の持続化を図る。
- ② 学びの質を高めるための手立ての工夫
 - ・自分の考えをもつための個人追究の在り方（キーワードとツールの活用）
 - ・ねらいや児童の実態に応じた学習形態の工夫（一斉・ペア・小集団など）
- ③ 児童が学習の高まりを実感できるふり返りの在り方
 - ・終末にふりかえりを位置付け、考えの変容や学びの質の向上を図る。

1. はじめに

本校では日常生活の中に「笑顔の“もと”」はあると考えています。「ともに」を「笑顔の“もと”」の合言葉に掲げ、「仲間とともに」「先生とともに」「家庭・地域とともに」の3つの「ともに」を大切にして、笑顔あふれる学校を目指して実践を行っています。

2. 実践と成果

（1）実践1:仲間とともにつくる「笑顔の“もと”」

運動会では、団ごとに応援を行っています。団席の動きを揃えるために練習を繰り返し、一体感を作り出しています。団の色は団リーダーによるゲーム形式で行う抽選会で決まります。全学級に体育館での様子をWeb配信で伝え、楽しい様子やこれから始まる運動会へのワクワク感を味わえるようにしました。

4月に行った「1年生を迎える会」では、各学年が動画を撮影し、Web配信をして歓迎する気持ちを伝えました。1年生の子どもたちの笑顔を2～6年生のみんなでつくりだすことができました。

人権委員会では、よいことみつけ活動を行っています。仲間のよい姿を認め合うとともに、お昼の放送で紹介をして広めています。自分のよいところを自覚したり、仲間のよさから学んだりすることができる活動になりました。

生活委員会では、校門の近くのあいさつロードであいさつ活動を行いました。登校の際に仲間と元気な挨拶をし合うとお互いに笑顔になり、気持ちよく1日を始められました。

（2）実践2:先生とともにつくる「笑顔の“もと”」

担任や学年の先生から学習や生活の中での素敵な姿を表彰し紹介する活動を行いました。言動に対する価値づけをすることにより、自己有用感や自己肯定感を高めることができました。

（3）実践3:家庭・地域とともにつくる「笑顔の“もと”」

地域や家庭の見守り隊の方による登下校でのサポートをしていただいています。安全にかかわるだけでなく、あいさつや声をかけていただきコミュニケーションをとるなどをしていただいています。子どもたちの安全・安心を支えてもらっています。

（4）実践4:学びの場でつくる「笑顔の“もと”」

国語科の研究を中心に「多様な考え方に寄り添い、共に高まり合う」ことを目指して実践を積み重ねています。児童の思考をイメージした単元構想や小集団交流を効果的に取り入れた学習、ICTを活用して考えを深めることに力を入れています。今年度は特に小集団交流に重点を置いて実践してきました。小集団での交流によって自分の考えを表出する機会が増え、抵抗感を感じる事が少なくなり仲間に伝えたいという気持ちを持つことを目指しています。また仲間と自分の考えの共通点や違いを意識することで、考えが深まり学びの中に喜びを感じられるように少しずつなっています。

3. 今の笑顔を未来の笑顔につなげるために

行事・児童会活動・学習など、学校生活の様々な日常の場で出会った「笑顔の“もと”」を積み重ね、児童一人一人が自分自身の「笑顔の“もと”」が何かを自覚していくことが未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」になると考えています。そのためにキャリアパスポートを記録だけに留めることなく、自身の良さと頑張り、成長の記録としてだけでなく、自身の「笑顔の“もと”」を自覚させ、個々の財産につながるような活動を今後も仕組んでいきたいと考えています。

令和5年度 「笑顔の学校」公表会 広陵中学校



学校の教育目標

ひびき合い高め合う生徒

広陵中学校の未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」は・・・

たくましさ
「生徒の思いや願いを実現させるための行動力」

【研究主題】

自ら求め、共に学び合い、学びを深める生徒の育成

～一人一人が「できる・分かる」を実感できる授業づくりを通して～

【研究仮説】「自ら求め、共に学び合い、学びを深める生徒」の育成

- (1) 学習内容の関わりから、生徒自身が知識・技能や各教科における見方・考え方を、主体的に繰り返し習得し、活用できるよう単元の指導計画や単位時間の指導過程等を工夫する。
- (2) 各教科の求める資質・能力に応じた必然性のある仲間との追究や聴く・話す活動の場を意図的・計画的に位置付けるための教材研究を深める。
- (3) 生徒自身がその時間に「できたこと」、「分かったこと」の自覚を促す評価方法を工夫し、指導過程の中に適切に位置付ける。

【研究内容】

【研究内容1】
生徒が確かに知識・技能を獲得し、課題を解決しようとする指導の工夫

【研究内容2】
仲間と関わり合って追究したり繰り返したりする学習過程や場の工夫

【研究内容3】
「できた」「分かった」ことを実感させる評価の工夫

日常の授業や生徒会活動の中に、意図的に交流(仲間と関わる場面)を位置付け、仲間との関わりを創っていく

1. はじめに

本校の発表をご視聴いただいた皆様、誠にありがとうございました。また、公表会後には励ましのお言葉や、本校の研究が更に良くなるようにと課題点や具体的な改善案をいただきました。重ねて御礼申し上げます。

2. 実践

「笑顔の”もと”」＝「たくましさ」を、学習と生活の両面で伸ばしていこうと考えています。

①生徒に「自己決定の場を与える」

事柄の大小を問わず、生徒の意志や主体性を尊重することを念頭に置いた指導を心がけてきました。一方で自分の決断には、責任が伴うことを自覚させることにも留意しました。

失敗することもまた経験である、という寛容な受け止めをすることもまた、生徒の主体性を伸ばすのには必要なのだと考えています。

②生徒に「自己存在感を与える」

一人一役の下、誰もがかけがえのない存在であることについて、朝の会や毎日の記録、教室掲示などで頑張りを紹介しながら、クラスや学年全体で共有することを心がけてきました。自己存在感を脅かす事案については、職員全体で

対応しました。QUを指導に生かすために、要支援等配慮が必要なエリアに該当する生徒を一覧にまとめ、全職員で共有しています。それにより、教科担任や部活動の顧問など、複数職員が当該生徒を見守ることができます。有事のみならず、ケース会議は月に1回以上、恒常的に開き、SSWやSCとの情報共有も密にしてきました。生徒が自己存在感を感じられるよう、全職員が丸となり見守ってきました。

③生徒の「共感的人間関係を育成する」

自分のことを共感的に理解してくれる仲間がいることは、生徒の安心感に繋がります。

令和4年度の全国学力・学習状況調査の設問⑬「いじめはどんな理由があってもいけない」については、調査開始以来、初めて100%になりました。これまでの、仲間との適切な「関わり」を築くための指導による成果だと考えています。

3. まとめ

近年、多様で複雑な事情を抱える子どもが増加しており、指導の難しさを痛感することもあります。今後も実践を積み重ね、「たくましく」社会を生きる生徒の育成を目指します。

第39回教育実践研究助成事業教育実践論文候補者の概要

ことばへの見方を広げながら表現力を豊かにする「楽しい」英語科教育の在り方

～ 英語学習が英語「楽」習であるために ～

可児市立桜ヶ丘小学校 教諭 曾我 治寿

6年生の児童を対象に4月に行った英語によるコミュニケーションに関するアンケートでは、多くの児童が「コミュニケーションを前向きに楽しむ態度」をもっていることが分かった。一方、児童の興味・関心の対象は、英語を使いこなすこと／ことばの仕組みが分かること／ことばの背景にある文化の存在など多様である。本論文では、ことばの多様な側面を扱うことで児童の興味・関心を誘発する「楽しい」授業を展開し、表現力も豊かにする実践について述べる。

実践では、「楽しい」授業を実現するためにことばの3つの側面を扱った活動に取り組んだ。まず、ことばの意見を伝達し合う側面を扱う「妄想国家をプレゼンしよう！」(実践①)と「クエスト型 CAN-DO リストの作成」(実践②)である。次に、ことばの発想法を規定する側面や社会／文化／アイデンティティとの関わりという側面を扱う「What's this?活動」(実践③)と「英語の多様性を扱った実践」(実践④)である。以上4つの実践から楽しい授業を実現し、表現力を豊かにすることを目指す。

<講評>

児童の実態を把握した上で、子どもにとって楽しい授業にするための実践がなされている。特に、プレゼンの実践は、子どもたちにとっての必然性が高いため、楽しい授業となった。クエスト型 CAN-DO についても、オリジナリティーがあり、児童が実態に応じて学習を進めていくことができる教材となっている。これからの社会で生きていく力を子ども達に身に付けていくためにも、「英語楽習」の更なる実践に期待する。

自分のよさに気づき、成長し続ける児童の育成

～ 目標数値の可視化と「ジョハリの窓」を活用した実践を通して ～

可児市立今渡北小学校 教諭 梶原 楓也

本研究の目的は、仲間との関わりを通して、自分のよさに気づき、目標に向かって成長し続けようとする児童を育成することである。本研究では、特別活動における4つの内容のうち、「学級活動」を焦点化した実践に注目する。本学級における児童の実態から各活動において一人ひとりが自分に合った目標を設定し、「できた・わかった」と思える成功体験を積むことや、仲間との関わりの中で、自己のよさに気づき、実感することが大切であると考えた。その手立てとして、研究内容Ⅰでは、目標設定時に、児童自身に数値目標を設定させることで目指す姿を具体的に想像させ、主体的に活動できるようにすることをねらった。研究内容Ⅱでは、学級活動においてジョハリの窓（自己分析ツール）を活用し、自分のよさを実感し、ありのままの自分を承認する自己肯定感の育成を図った。

上記の実践に対し、Q-U による結果と研究内容Ⅱの実践前後の児童アンケート調査及び活動の振り返り記述文から本研究で提案する指導の方略と授業実践の有用性を考察した。

<講評>

「自尊感情測定尺度」や「Q-U」を活用し、分析を進めたことが、より詳細な実態把握につながっている。また、具体的な数値を入れて目標設定するよう指導したことが、児童の達成感にもつながっている。さらに、「ジョハリの窓」による自己分析を取り入れたことで、児童は新たな自分のよさに気づき、自信を持つことができた。先生が日頃から課題意識を持ち、新たな試みに果敢に挑戦してきたことが、今回の成果となっている。

チーム担任制を支える教務主任の在り方

～ 全職員で一人一人の生徒を支える職員集団を目指して ～

可児市立西可児中学校 教諭 瀬瀬 康暢

本研究の目的は、教務主任としての立場から職員に働きかけることを通して、今年度から実施の「学年チーム担任制」を、生徒の「自ら考え、判断し、決定する力」をつけるためのものとし、教師と生徒双方にとって有益な体制にすることである。教務主任として、教師が行う業務のデジタル化を図り、職員が生徒の情報を共有する時間を確保したり、週報を通して職員の意識改革を図ったりすれば、生徒一人一人に寄り添う教師の姿を生み出し、生徒が主体的に活動する姿を生み出すことにもつながると考えた。その手立てとして、研究内容Ⅰでは、年間を通して見通しをもてるようにするためのデジタル週報やカレンダーの作成、ペーパーレス会議など業務のデジタル化を図った。研究内容Ⅱでは、全職員が同じ方向を見て生徒の育成に携われるようにする週報での提案を行った。上記２点の実践に対し、生徒アンケートを実施し、それらの変容から本研究の有用性を考察した。

<講評>

デジタル週報やカレンダー作成を通し、チーム担任制の中でどう動くべきかを具体化することで、多くの先生の主体的な関わりを生み出している。さらに、生徒の姿を可視化できる工夫により、生徒の変化への気づきを促し、様々なアプローチを可能にしている点が素晴らしい。

また、アンケートを複数回実施し、生徒の気持ちに寄り添いながら工夫改善を行っていることが、チーム担任制への不安感の解消に効果を発揮している。今後も、チーム担任制を通して、生徒の主体性を高める実践の継続に期待する。

自分の考えを英語で伝え合うことに喜びを感じる生徒の育成

～ 目指す姿、考えや表現の広がりや深まりの「見える化」を通して ～

可児市立西可児中学校 教諭 三品 達也

本研究の目的は、自分の考えを英語で伝え合うことに喜びを感じる生徒を育成することである。本研究では、本校研究副主題である指導と評価の一体化の視点を生かした学びの「見える化」に着目する。全国学力学習状況調査質問紙調査の「英語の勉強は好きですか。」の質問に肯定的な回答をした生徒の割合が低いという課題を受け、英語で考えを伝え合う言語活動の充実を図る必要があると考えた。その手立てとして研究内容Ⅰでは、学習到達目標とその達成状況を評価するパフォーマンステストを設定することで、育成すべき英語力、その力を活用している生徒の姿を具体化することをねらった。研究内容Ⅱでは、学習支援ツールを活用し、多様な考えや表現を視覚化することで、生徒の考えや英語表現を広げたり深めたりすることをねらった。

上記２点の実践に対し、言語活動とパフォーマンステスト及び生徒アンケート調査を実施し、それらの変容から本実践の効果を検証した。

<講評>

「育成する力と目指す姿の具体化」「考え方や表現の多様性の視覚化」という手立てが有効にはたっている。アンケート結果をもとにして手立てを考えた「２段階方式の検証」は、説得力がある。「伝える力」を伸ばす手立てを考え、それをさらに「伝え合う力」へと広げたことが、相手の思いを知ったり、仲間から学んだりする「協働的な学び」につながっている。今後も「英語が好き」と思える生徒を育てるために、継続的な実践を進めていくことを期待する。

令和5年度可児市教育実践論文応募のまとめ

◇応募状況

校 種	職 務 別				年 代 別				性 別			領 域 別 (論文数)																						
	教 頭	主 幹 教 諭	教 諭	養 護 教 諭	合 計	20 代	30 代	40 代 以 上	合 計	男 性	女 性	合 計	教 科										小 計 ①	道 徳	特 別 活 動	総 合 学 習	外 国 語 活 動	学 級 経 営	生 徒 指 導	特 別 支 援	健 康 安 全	そ の 他	小 計 ②	合 計
													国 語	社 会	算 数 学	理 科	生 活	音 楽	工 美 術	技 家	保 体	英 語												
小			13		13	9	3	1	13	6	7	13	2		1		1	1			1	1	3	10	1	1						1	3	13
中	1	1	9		11	2	2	7	11	5	6	11			2							2	4						1	1	5	7	11	
計	1	1	22	0	24	11	5	8	24	11	13	24	2	0	3	0	1	1	0	1	1	5	14	1	1	0	0	0	0	1	1	6	10	24

＜優秀賞＞学番順					
No.	学校名	氏 名	領 域	研 究 テ ー マ	
1	桜ヶ丘小	曾我 治寿	英語	ことばへの見方を広げながら表現力を豊かにする「楽しい」英語科教育の在り方 ～英語学習が英語「楽」習であるために～	
2	今渡北小	梶原 楓也	特別活動	自分のよさに気づき、成長し続ける児童の育成 ～目標数値の見える化とジョハリの窓の活用から ～	
3	西可児中	額額 康暢	管理経営	チーム担任制を支える教務主任の在り方 ～全職員で一人一人の生徒を支える職員集団を目指して～	
4	西可児中	三品 達也	英語	自分の考えを英語で伝え合うことに喜びを感じる生徒の育成 ～目指す姿、考えや表現の広がりや深まりの「見える化」を通して～	
5	西可児中	青木 裕介	管理経営	生徒も教師もWell-beingを実感できる学年経営の在り方～学年チーム担任制を柱にして、主体性とリレーションづくりの力を身に付けられる生徒、働きがいと働きやすさを感じられる教師～	

＜優秀賞＞学番順					
No.	学校名	氏 名	領 域	研 究 テ ー マ	
1	今渡南小	豊田 拓也	国語	児童に意欲を持たせ、議論を通して学び合う集団を目指して	
2	帷子小	山田 真央	英語	自ら英語でコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 ～Small Talkの実践を通して～	
3	東明小	名倉 さおり	管理経営	持続可能なふるさと教育の推進 ～地域力を生かし、ふるさとに愛着をもつ児童を育てるふるさと教育の在り方～	
4	蘇南中	福住 恵子	健康安全	先生方の健康・笑顔が子どもたちに還元されますように～2年目の取り組み～	
5	西可児中	石黒 智子	管理経営	「Well-beingな学校づくり」を推進するための教頭の役割 ～ 「チーム担任制」の導入 初年度 ～	
6	西可児中	長谷川 由奈	管理経営	指導と評価の一体化の視点を生かした学びの「見える化」 ～全職員で取り組むために研究推進委員長として～	
7	東可児中	大野 朝香	数学	数学の楽しさを実感できる指導 ～思考力・判断力・表現力を育成するための数学的活動を通して～	

＜奨励賞＞学番順					
No.	学校名	氏 名	領 域	研 究 テ ー マ	
1	今渡南小	岩田 綾香	英語	主体的に学び、コミュニケーションを図る児童の育成 ～単元末の姿を見据えた、言語の獲得と言語活動の工夫～	
2	今渡南小	柴山 亜沙美	体育	仲間の考えやアドバイスを聞き、自己の考えを深めて活動するマット運動 ～児童が自ら練習方法を考える～	
3	帷子小	岩田 純弥	算数	主体的・対話的な授業の在り方 ～「わかった」「できた」を実感できる授業の工夫～	
4	春里小	木村 秀徳	生活	表現し考えることを通して、気づきを確かにしたり、新たな気づきを得たりする児童の育成	
5	春里小	小久保 沙希	家庭	学びを家庭で実践し、生活をよりよくしようとする児童の育成	
6	広見小	加納 佳幸	国語	国語の学習を対話的・主体的に学び続けようとする児童の育成 ～児童のやる気を引き出すための実践～	
7	今渡北小	田上 千紘	音楽	主体的・対話的に学び、音楽と豊かに関わる児童の育成 ～感じ取ったことと聴き取ったことを関わらせる活動を通して～	
8	今渡北小	赤羽 美里	道徳	道徳で自己の考えを深める児童の育成 ～ICTを活用した授業改善～	
9	中部中	山田 千博	特別支援	生活単元学習・技術・家庭科を通してコミュニケーション能力を高め合える生徒の育成	
10	西可児中	大前 雅紀	管理経営	教育相談・不登校支援の在り方 ～学年チーム担任制・Well-beingな学校の実践を通して～	
11	西可児中	額額 康暢	数学	データの活用における批判的思考力を育成する指導の在り方 ～指導と評価を一体化するICTを活用した数学科の実践を通して～	
12	東可児中	額額 夏望	英語	「できた・わかった」を実感しながら、コミュニケーションに挑み続ける生徒の育成 ～具体的な課題設定と中間交流の位置付けに関する考察～	